

VII 事故防止について

〔打撃練習中の課題〕

1. ネットの設置

ネットの破損、破れがないか毎回練習前に点検する。

防護ネットの設置は2人以上で行い適切に設置できているかチェックする。

途中で左右投手の変更により、設置を変える時も必ず複数でチェックする。

L字ネットの三角部分のネットの状況も必ずチェックする。

2. 投球方法について

投球は、他の投手と時間差をおいて打球の行方を見てから順次投球する。

複数で打撃を行う時は、捕手は投球の返球をせず、投手の横にボールのストックを準備するL字ネットで投球する場合、ボールのストックは投げ手と反対側に置く。

上記のボールをストックする球数がなく、投げ返すときは他の打者の打撃のタイミングを必ずずらすこと。

投手は投球後、必ずL字ネットの陰に隠れるようにする。不用意に自分のところへ打ち返された打球の処理をしない。

打撃投手が疲れてきたらネットに隠れる動作が緩慢になることに留意し、早めの投手交代を心がけること。

投手と打者との距離を短くして打撃練習を行う場合は危険が増すことに留意すること。

3. ヘッドギアの装着について

打撃投手は必ずヘッドギアを正しく固定し、装着すること。

ヘッドギアの耐用年数は3年とされている。炎天下で使用するためプラスチックは経年変化することを理解しておくこと。

ヘッドギアの耐用年数を確認するため購入年月を内側に記載しておくこと。

ヘッドギアを投げ捨てたり、乱暴に扱わないようにする。

一度大きな衝撃を受けたとき、外側のシェルが亀裂、破損したり、また内側の発泡スチロールが衝撃で弾性がなくなっていることがあるので以後の使用はしないこと。

打者用ヘルメットは投球に対する防護用品で、投球より衝撃の大きい打球に対する防護としては十分な強度を有していないことに留意し、投手は打者用ヘルメットの代用をしないこと。また打者用ヘルメットが投球時にずれて負傷した事例もある。

4. 野手の守備について

内野手が守備につく場合は、必ず守備動作が終わってから次の打撃がおこなわれるようにする。

高く打たれた飛球を追う時は次の打球に注意し、次の打球が来れば捕球を見送る。

内野手から1塁への送球を行う時は他の野手からの送球が重ならないよう留意する。

打球を処理する野手がファンブルしてさらに1塁に送球しようとする、次の打球を処理する野手と交錯することがあるので危険である。

守備行為をした後、元の位置にもどるとき、打撃方向に背を向けないこと。必ず後ずさりして打者から目を離さないこと。

5. マシンの使用について

マシンの始動時の調整は必ず複数の部員で行い、打ち出される方向に部員がいないか十分確認すること。

マシンの調整時に捕手が受ける場合は、必ずマスクなどすべての捕手用具を装着して行うこと。

マシンのボールを打ち出すネットの穴から打球が飛びこむことは常々起こりうるので、マシンの補給者防護用ネット（コの字型ネット）を設置するか、捕手用ヘルメットとマスクを装着してボールを補給すること。

6. ティ打撃について

打球を受け止めるネットの破損がないか毎回使用時に確かめること。

ネットの位置や打ち出す方向が適切か、二人で確認すること。

隣の打者および補給者との距離を十分に取ること。

補給者は打球に対する防護ネットを活用することが望ましい。

〔その他全般的な事故防止策〕

1. 1年生の事故の多発について

これまでの事故発生事例を見ると、入学後9月までの1年生の負傷者が多い。1年生として練習の中でどのような役割、動きをするのかが十分理解されていないことによるものと思われる。

ファールボールの処理や用具の片づけに注意がいき、次の打球が飛んでくることに気がつかずに事故が発生している。打撃練習では、硬式野球のスピードに不慣れで起こる事例もある。

2. 技量にあった練習方法を実施する

前項の1年生の事故発生要因に加え、部員の技量にあった練習方法を心がけること。プロ野球や大学・社会人などの練習方法で、参考にするのは良いが、技量にあった練習方法を採用すること。

3. ノック（守備練習）中の事故防止

守備練習で打球を処理してからの送球先を十分声かけをして行うこと。誤った送球先で重大事故につながる恐れがある。

野手がファンブルしたときに、送球先が変わることがあることも十分理解して守備につくこと。

内外野に分かれて2カ所でノックを打つ場合、内野手とのクロスプレイに留意すること。この場合、誤って打球を打ったときでも内野手に当たるようなことのない守備体形を工夫すること。

4. その他の事故について

打球を処理してから次のプレイがどのように行われるか周知されずに起こる事故がある。

例えばダブルプレイの練習で、気付かず1塁に直接送球してしまうケースなど。

同じくダブルプレイの練習で他の内野手から送球を受け1塁に転送する際、送球から目を切ってしまい、捕球を損ねて胸に受けて心臓しんとうになった事例がある。

外野手が打球を2人で追い、声かけが不十分で部員同士が接触して起こる負傷がある。

このような事例の防止には、守備をしている野手全員で声かけをし、次のプレイへの集中力を高めること。

内野守備でイレギュラーバウンドによる負傷も日常的に起こりやすい。ある程度の練習を行ったら常にグラウンドを修正する手間を惜しまずやること。

試合中でも起こりうるケースで、捕手が盗塁阻止で2塁に送球する場合、投球を終えた投手が目を切り、捕手の送球ラインから避ける行動をとらないことのないよう常々注意すること。

投手は投球後、すぐに捕球態勢をとるよう留意し、常に打球が自分のところに打ち返されるという意識を持つこと。

キャッチボールの練習の際、相手部員の後ろにボールに注視していない人がいるときは送球を見合わせる。特に校庭で複数クラブが練習したり、下校生徒の通路となっている場合は留意すること。

指導者はAEDの使用に関する研修を積み重ね習熟しておく必要がある。AEDの保管場所の確認、生徒への研修なども重要な要素である。

心臓しんとう防護用の胸部防護パッドが市販されており、内野手の守備練習時の活用も推奨したい。